

新しい詩の声 2026  
(第10回)・作品

〔最優秀賞〕

## 竹野 滴

### 食育の春

じゃがいもは皮膚が痒い  
春はなお痒い  
ちいさな手たちにはじめてさわられて  
いまここがなつかしく痒い

包丁は正しく善い  
が  
あぶない  
ので  
ピーラーは痒い  
ひたむきさには耐えられない  
痛みがわかりすぎて  
じぶんを剥くのにはやさしすぎる

皮膚は剥き出しの内臓で

胃よりさだかに胃だ

世界には貧困に喘ぐ人もいるのだから

残さず食べなさいという道徳は

ひりつく

じぶんというものがゆでられて

かゆくもあつくもなくなったら

のみこまれて

わすれた

健全ないのちは忘却からはじまる

次はなに？

何を覚える？

ねえ先生？ つぎは？

疑問符たちが

そろそろ痒い

〔優秀賞〕

## 灰島 りんこ

### 春の幽霊

目蓋の裏に淡い血が透け、春は水槽の深度を増す  
私たちの肺を 緑の光がゆっくり満たしていく  
角を曲がれば 見知らぬ誰かの白い帽子が  
陽の中で、記憶の抜け殻のように透き通っていた

かつて祈りだった言葉の破片が 岸辺を濡らし  
拾い上げれば重く、それはあなたの名を呼ぼうと  
化石になった 私の喉の震えに似ている  
銀輪が弾く光は 鋭い鱗となり 私たちは  
視力を失う魚のように 静かに口をすすぐのだ  
沈黙は、古い花瓶の底に溜まった水の匂いに化け  
花が自らの美しさの重みで折れてゆくとき  
春という生き物の 震える肋骨のようにやく触れた

光の檻のなかで 私たちはあかるい幽霊になり  
まだ誰も踏んでいない、柔らかな光の泥のなか  
祈りと呪いのあわいを 静かな足取りで歩く  
私たちはいつか透明な標本になるのかもね  
そんな予感さえいまは産毛のように、あたたかい

アネモネがうつむくのは 地中の星を数えるから  
私たちの胸のなかに一軒だけの空き家があること  
そこにはいつも散ったばかりの光を敷き詰めて  
いつか帰る場所を、ひっそりと温めていること  
すべては 春の魔法が解ける前のひみつの話

足元で 猫のしっぽが静かな午後をなぞってゆく  
時計の針が重なるたび世界は新しく書き換えられ  
私たちはただ、眩しさに目を細めていた  
水彩絵の具がコップの中でゆっくり解けるように  
あなたの声は、春の泥を抜けてきた水のよう  
濁りのない和音となって、静謐な食卓に満ちる  
私たちは、まだ誰も触れていない白い時間を  
銀の匙ですくいきあげ、そっと口に運ぶだけでいい



〈優秀賞〉

佐藤 yuupopic (サトウユウピック)

## 永遠の静物 \_Eternal Still Life

わたしは動物

あらゆる生き物

喉をふくらましては 嘶しななき

ぶるつと身体からだを震わせ

毛づくろいをしては、羽ばたくもの

清々しい 苛立ちもある

俊敏とうもぎで癡猛

賢くて鈍感 繊細で勇敢

物質ぶつであり 物体ぶつで塊

ほとんどが水でできている

百代ひゃくだいの過客かかく それぞれの旅

はじまりと終わり

出会い別れる その繰り返し

理ことわりと**いうのなら、**

それもいい

林檎ではない ペンではある

レンズはあるが シャッターはない

ゆえに、カメラではない

ただしそれとは 別の切り取り方で

景色や時間や空間、そして記憶を

定着することができる

それは 皿の上にある

頬ばるとぼろぼろと崩れる パイ状の甘いお菓子

まなざしを持つている

揺蕩たゆたい うつろう 同時に止とどまっている

たしかに存在する

それは現在であり 過去ともいえる

一瞬のきらめきで

はるか、遠い昔に天の川の片隅で 爆発して

跡形もなく消えた星々の中の ひとつ

なのに

意外と、永遠。

〈ジュニア賞〉

柳瀬 優那

心と空気

心は空気のようにだ  
軽いわけではない

まわりから

あたたかくされるとうれしくてふくらむ  
つめたくされると悲しくてへこんでしまう

ちっ素っていうのは

うれしさで

酸素っていうのは

悲しさで

他のものは

いろんな気持ち

なのかもしれない

## 受賞のことば・受賞者略歴

### ●最優秀賞

竹野のしずく  
滴

#### 〈受賞の言葉〉

今回、本作により受賞の報せを受け、喜びとともに、心身の引き締まる思いを感じております。

作中、「健全なのちは忘却からはじまる」という言葉が出てきます。東日本大震災後の当地仙台においても、「あえて考えないようにしている」という声や、あるいは、「忘れないけど忘れられない」という声を耳にしました。

考えつづけること、思いつづけることはくるしい。健やかではいられなくなる。

しかし世界には、考えつづげなければ、思いつづげなければいけない出来事がつぎつぎと起こっています。

では忘却とはいったい何か。健全とはいったい何か。自分がつくったこの作品によって、詩人と

して生きつづげるための、新たな宿題を与えられた心持ちがいたします。ありがとうございます。

#### 〈略歴〉

1981年大阪府生まれ。宮城県仙台市在住。関西福祉科学大学卒。特別支援学校職員。

詩誌「とんてんかん」、小説同人誌「麦笛」所属。

### ●優秀賞

灰島りんこ

#### 〈受賞の言葉〉

この度は、このような素晴らしい賞をいただき、誠にありがとうございます。10年ほど前、私は詩を書き始めました。言葉に触れる時間は、世界と静かにつながる、かけがえのないものでした。

しかしある時期、身辺に苦しいことが重なり、言葉に向き合うことが難しくなりました。やがて私は、詩から離れました。何も書けないまま、ただ季節だけが過ぎていきました。

そんなある日、友人が「また詩を書いてみては」と声をかけてくれました。そのひとことが、閉じ

ていた扉を、そっと押ししてくれました。恐る恐る、もう一度言葉に触れたのが、1年前のことです。

自分の奥に沈んでいるものに触れることは、やはり痛みを伴いました。けれど同時に、そこにしかない光があることも、あらためて知りました。

拙いながらも、自分の内にあるものをすくい上げるように綴った言葉を、選考委員の皆さまに受け止めていただけたことを、深くありがたく、嬉しく存じます。

「好きなことを大切にしていい」と背中を押してくれた友人たち、そして家族に、心より感謝申し上げます。いただいた言葉を胸の奥に灯すようにして、これからも、不器用にもがきながら書き続けていきたいと思っています。

#### 〈略歴〉

東京都在住。東京外国語大学卒。元新聞記者。現在は新聞社にて企画職に従事。2017年、日本現代詩人会「第1回現代詩投稿欄新人」に選出（別名義）。児童虐待の経験者を支援する団体「サバイバーbase」のプロジェクト「虐待被

害者という勿れ」に短歌連作を提供し、2025年より動画作品として発表。X（旧Twitter）：@hajima\_rinko

hajima\_rinko

#### ●優秀賞

#### 早田悠一郎

#### 〈受賞の言葉〉

日々生きていると、本音ではない言葉を使わなくてはならない時があります。好きでもないお世辞を言ってしまったり、言いたかったことを押し殺して無難な話をしたり、あるいは時々、誰かに嘘をついてしまうことさえもあります。

私は、生きていく為にどうしてもそのような偽物の言葉に頼らなくてはいけません。決してそれに頼ることが一概に悪いわけではないと思うのですが、やはり偽物の混じった言葉が日常を埋め尽くしてしまうのはとても苦しいです。

だからこそ、せめて詩を書いている時だけは、自分の奥底にある本物の言葉に触れていたいと切に願うのです。

「発語」という詩は、私のなかにあるとても個人的な言葉でした。物語でもなく、意見でもなく、誰かの言葉への相槌でもない。強いて言えば、それはただの鳴き声に近いものだったのだと思います。

それを、なるべく生ものに近い状態で思い込みや偽りの意識が混じらないように、どうにかこうにか綴っていく。この詩は、そのような本物の言葉に触れるための試行錯誤の途中で書くことができた詩でした。

そんな声の発露が、誰かの耳に響いたのだという手応えがなによりも嬉しく、そして同時にとてもありがたいことなのだと感じています。

喜びも、痛みも、静けさも、生きている私を感じることでできる、あまねく感覚を少しでも掬い上げられるように、これからも弛まず言葉と向き合っていきます。

この度は光栄な詩の賞に「発語」を選出しいただいたこと、厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 〈略歴〉

二〇〇一年生まれ。埼玉県在住。日本大学藝術学部文芸学科卒業。大学在学中に詩作を始める。

## ●優秀賞

佐藤 Yuppovic (サトウユウポビック)

## 〈受賞の言葉〉

このたびは第10回「新しい詩の声」優秀賞を賜り誠にありがとうございます。2月の定例会ポトリリー・リーディング特集回に伺った際に本賞を知り応募いたしました。詩は記憶を記録するメディアで、過去へ現在へ未来を自在に往来可能なタイムマシーンかつ、日々の暮らしと密接な存在です。先の戦争より81年、女性の参政権の初行使より80年を迎えたこのくにの、先行き不確かな2026年の「Be Here Now」を生きるひとりの詩人として、新たな覚悟を以って表現と真摯に向き合う得難い契機となりました。わたくし事ですが、かつて大学卒業と同時に映画助監督業を始め、映像制作会社勤務のゼロ年代初頭【インター

ネット詩】に出会いました。職業としての制作と個の表現との乖離や矛盾に葛藤、懊悩する最中、「ひとりで映画を撮る方法はないか？」と模索する過程で辿り着いた『ことばで映画を描く』試みが詩作の原点でした。時代背景やロケーション、登場人物の配役やキャラクター設定、カメラ位置や照明他すべてが思うままに一切の制約も制限もなく、指先ひとつで時間や距離すら越えることができる。その万能さに「詩はなんて自由なんだ！」と、薄暗かった視界が一気に開けるようでした。あの新鮮な驚きとよろこびは今も色褪せず胸に明かりを灯してくれます。挫折や遠回りだらけの道行で詩に拾ってもらった身ゆえに、これからも自らの眼差しで思考し誠実に描き、様々な声を聴き、読み続ける所存です。愛するものを奪われぬ、奪われぬために。くちびるに詩を。ポケットに生活。それぞれの場所で声上げ続ける spoken wordを。い縁に深く感謝申し上げます。

#### 〈略歴〉

1973年東京生まれ。名前の由来は yuu ×

popmusic。1996年東京造形大学美術学科比較造形専攻卒業。映画助監督、映像、WEB制作、旅行業を経て、会社勤めの傍ら詩レーベル運営、詩×音楽ユニット pop/jective 他、詩と声と本と本屋にまつわる活動を行う。既刊詩集『トランジッション』『球春礼賛2017』『野球という名の、ひかりに似たもの』『シの本』。受賞作収録の詩集＋声のアルバムを制作中。

#### ●ジュニア賞

##### 柳瀬優那

#### 〈受賞の言葉〉

この度は、このような素敵な賞をいただき、とてもうれしく思います。

私がこの詩を書いたきっかけは、学校の国語の授業でした。4年生の冬頃、私の学校でこんな課題が出ました。自分でテーマを決めて、詩を集めたり作ったりしなさいということでした。私は、「星と地球」をテーマに決めて詩を書き始めました。だんだん書いているうちに楽しくなってきました、

他の人たちよりたくさん書くようになりました。その課題の提出が終わっても、家で詩を書きました。そのうち、私は自分の詩の実力はどうか、かが気になり、自らコンクールを探して応募してみました。まさか賞をいただけるとは思っていなかった、とても驚きました。これからも楽しかったことや心に残ったことなどを詩に表していけたらいいと思います。

#### 〈略歴〉

小学5年生（投稿時は小学4年生）。埼玉県在住。

## 作品公募の概要

田中眞由美

日本詩人クラブは、全国から幅広く作品を公募することで詩文化の普及発展に寄与したいと、2017年に新しい詩人の発掘を目的とした「新しい詩の声」賞を創設しました。応募対象は日本詩人クラブの会員ではない方（会友は応募対象）で、今年度で10回目になります。

今回も北海道から沖縄まで幅広い地域から248名の応募がありました。年齢層も幅広く、最年少は8歳、最高齢は91歳の方でした。

応募作品の中から、最優秀賞1篇と優秀賞3篇、さらに斬新な10歳の作品1篇をジュニア賞（15歳以下）として選びました。7月11日の贈呈式で賞状・賞金・図書券を贈呈し、その様子はYouTubeでも発信します。また、日本詩人クラブのホームページと会報「詩界通信」115号に、公募状況と受賞作品、選考経過、116号には贈呈式の模様等を掲載します。応募くださった作品について

では、受賞者以外の全員の方に、選考委員5人が分担して選考委員のコメントをお送りする予定です。お読みいただき、今後の創作活動に活かしていただければと思います。

## 選考経過報告

### 田中真由美

選考委員は、秋元炯、遠藤ヒツジ、田中裕子、田中真由美(委員長)、松村信人の5名。(五十音順)  
まず一次選考で28名の作品から各委員が3月22日(日)を締切日に、理由を述べたうえでジュニア賞1作品と4作品を推薦しました。その結果、予備選考通過作品は次の18作品でした。

竹野 滴 「食育の春」 2票  
灰島りんこ 「春の幽霊」 2票  
泉 流伽 「けんけんと」  
猪爪知子 「進化」  
尾内甲太郎 「奇数の雨」

大竹幸典 「電子の門、あるいは帰らざる背」

鑲眼 「メイク」

こやけまめ 「欠陥」

佐藤 yumpopic 「永遠の静物」

Shalon 「進海」

砂城つぼみ 「鯨」

田中淳一 「迎え火」

のかた 「あんこ くよりくらく.対A仕様」

早田悠一郎 「発語」

平岡眩 「メーデー」

福富ぶぶ 「子葉」

三日月ユキ 「address」

Yubume 「どうせ」

ジュニア賞

柳瀬優那 (10歳) 「心と空気」

和田拓実 (9歳) 「夜空星色」

(敬称略・五十音順)

重複して推薦があったのは「食育の春」2票と「春の幽霊」2票でした。この結果をふまえ、18作品からそれぞれが改めて4作品を選び、4月4

日(土)に日本詩人クラブ事務所まで最終選考委員会に臨みました。当日急なご事情で松村信人委員は欠席でした。

候補の18作品について1篇ずつ丁寧に意見を述べらうと、おおよその作品が絞りこまれたので1人4篇ずつの投票を行いました。結果は「春の幽霊」3票、「食育の春」2票、「奇数の雨」2票、「永遠の静物」2票、「address」2票、「けんけん」と「電子の門、あるいは帰らざる背」1票、「あんなこくよりくらく」1票、「子葉」1票、「発語」1票、「進海」1票でした。1票でも残したい作品を加え、さらに検討し、1番4点、2番3点、3番2点、4番1点として再度記名の投票をしました。結果、「食育の春」12点、「春の幽霊」12点、「発語」9点、「永遠の静物」7点となりました。ここで12点の2作品について再度検討し、最優秀賞は竹野滴作品「食育の春」、優秀賞は灰鳥りんこ作品「春の幽霊」、早田悠一郎作品「発語」、佐藤 yuupopic 作品「永遠の静物」に決定しました。また、ジュニア賞は独自性がありみずみずしい感

性を持つ9歳の和田拓実さんと10歳の柳瀬優那さんの2人のそれぞれの良さに注目しましたが、柳瀬優那作品「心と空気」をジュニア賞としました。若い感性に審査員一同刺激されています。

第11回「新しい詩の声」賞の募集期間は今年から変わり、9月から12月末日となります。お気をつけ下さい。今回残念だったみなさまの再チャレンジをお待ちしています。

## 選考委員

秋元炯・遠藤ヒツジ・田中裕子・田中真由美(委員長)・松村信人